

第2回持続可能な社会・成長する農林水産づくり部会 (R5. 4. 28) における主な意見

<農業>

- ・国で食料・農業・農村基本法の改正に向けて議論が行われており、主なテーマは食料安全保障や自給率の向上である。全国レベルでは国消国産といった運動も展開されており、県レベルでは県産県消という考え方になるが、成長戦略に関連させるべきはないか。
- ・稲作から園芸作物への転換について、米農家は、手のかかる作業が必要な園芸作物にはなかなか手が出ない。作業の機械化が進めば、取り組んでもらえるのではないか。
- ・米の品種改良は、国や県では、これまで食味向上に取り組んできたが、今後は収量の多い品種の育成が必要。また、今後も温暖化が進むと考えられることから、食味はそこそこでも、暑さに強く収量が多い品種を育成できれば、米づくりに取組みやすくなり、所得につながるのではないか。
- ・日本の農政は、この作物を作りなさいと言ってきて、それが作れば作るほど余ってきた歴史がある。農地で何を作るか、どう最適化するかは、その地域や気象条件、環境問題の関係から、経営者自身が選ぶものであると考える。
- ・農業系の高校、大学からの就農促進は県内だけの話なのか。県内だけで考えてしまうと、間口が非常に狭くなる。また、技術系のMOT (management of technology : 技術経営) の連合大学院を作り、従業員だけでなく、中堅、それから経営者のリカレント教育を進める必要がある。
- ・スマート農業はあくまでも手段であり、目的化してしまうと、ゴールがぼんやりしてしまう可能性がある。

<林業>

- ・第1次産業を持続可能な産業にしていくには、担い手の確保をどのようにするか、もう少し魅力のあるものにしなければ、なかなか若い人が就業してくれない。林業は機械化が進んでおり、そういった面を若い人にPRしていく必要がある。
- ・骨子案には「持続可能な循環型社会づくり」、「自然と人との共生できる社会づくり」が盛り込まれており、まさしく、木材を活用していくことがSDGsや脱炭素につながるということを県民に広くPRしていくことが重要である。
- ・石川県産材のさらなる活用に向けて、耐火性が高いなど付加価値の高い木材を供給していくことが必要。

<水産>

- ・養殖は、成長スピードの早い魚種しか適さず、サーモンのように大量の水が必要なものもあり、ハードルが高い。
- ・資源管理を徹底しているが、当日の朝になるまで、漁獲量が分からないため、流通に必要

なトラックが確保できない場合もある。県内の大型船は、たくさん獲れた場合に、冷凍施設のある舞鶴や境港で水揚げすることもあり、石川県のためになっていない。

- ・水産物の輸出は、県内で多少取り組んでいるが、金沢港から横浜や神戸まで輸送した上で輸出している。金沢港の中に施設が整備できれば、中国などにも輸出が広がっていくと思う。

<環境>

- ・カーボンニュートラルの観点から考えると、農業と環境の連携は非常に重要である。特に農業では肥料の高騰が課題になっていることから、肥料成分の窒素やリンやカリを積極的に循環させていくことが、ますます重要になる。
- ・農業や林業のバイオマスは、燃やしたり、堆肥化したりすると二酸化炭素が発生するが、できるだけ二酸化炭素を発生させないで、バイオガスとして回収し利用することは、カーボンニュートラルの実現にとって大切。